

試合における認知 - 行動の構造的検討
 ～本学野球部員の「語り」から～

土平 友樹 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)
 指導教員 豊田 則成

キーワード：自分らしさ 不安や苦悩 他者の存在 認知行動療法

1. 緒言

本研究は、本学野球部員を対象として「試合の中で選手は大事な局面をどのように捉えているのか」というリサーチクエスチョン (Research Question: 以下 RQ と称す) を設定し、試合における認知 - 行動の構造の意味を明らかにし、発展継承可能な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

2. 方法

本学硬式野球部に所属している野球部員、投手 2 名、捕手 2 名、内野手 1 名、外野手 1 名を対象に、質的研究の代表的手法である、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach : GTA) を用いて行った。

3. 結果と考察

本研究は、「試合の中で選手は大事な局面をどのように捉えているのか」という RQ の下、質的なアプローチをした結果、『敢えて第一歩を踏み出し、意欲が芽生えること

で、不安や苦悩を経験するが、自己と向き合うことで、他者の存在を認識、ひいては自分らしさに気づいていく』プロセスとして捉えているという仮説的知見を導き出した。

4. まとめ

- ①大事な局面に立たされた時、自分らしさを忘れさせてはいけない。
- ②不安や苦悩を経験し、辛い思いをする選手がいても、自分自身と向き合わせ、他者の存在を改めて認識させること、また自分一人でプレーしているのではないことを気づかせることが大事である。
- ③結果を求めすぎることなく、何事にも必死にプレーをさせること、またその為にはしんどい練習をし、苦しい経験させること、その中で初めて選手としての成長だけでなく、人間的にも大きく成長させることが大事である。

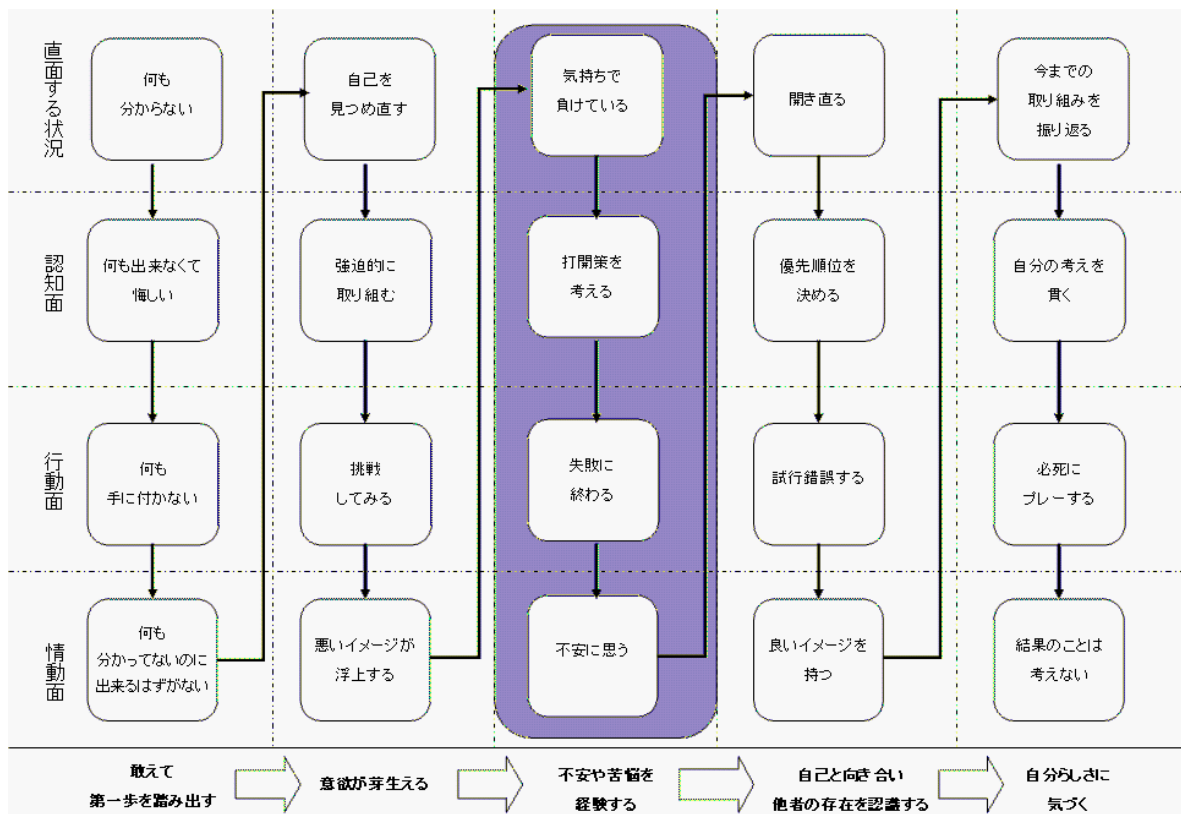


Fig.1 野球選手の認知 - 行動の変容に伴う情動プロセス